

---

## 総 括 — 調査成果の総括と今後の課題 —

私たちが1996～2001年度の基幹研究「地域社会における基層信仰の歴史的研究」の一貫として実施した、奈良県における中・近世から現代にまで継続して利用されている墓地のいくつかについての記録作成調査の成果については、第1部、第2部の各章に分けて報告したとおりである。このうち、第1部は奈良盆地の東南に広がる宇陀地域とその北に位置する都祁地域の村落墓地に関する調査報告であり、第2部は奈良盆地の郷墓に関する調査報告である。

□

第1部では、宇陀地域のうち<sup>くちうだ</sup>宇陀盆地の<sup>にゅうだに</sup>菟田野町入谷墓地とその北方に位置する都祁村<sup>はやま</sup>吐山地区のいくつかの村落墓地の記録調査の結果を報告した。このうちまず宇陀盆地については、大字陀町と菟田野町域の現存の墓地についてゼネラルサーベイを行い、この地域の現在の墓地のあり方を調査した。

この地域は両墓制的慣行がごく最近まで行われていた地域であり、ハカと呼ばれる埋葬地とラントウバと呼ばれる石塔造立地が分離している例が多い。その中でも山中に村あるいは垣内の共同のハカを営み、ラントウバは各家の屋敷の近くに営むタイプが圧倒的に多く、これについて丘陵の上方にハカを営みその下方に各家のラントウバを設けるものや、丘陵上に各家のハカとラントウバを接して営むものなどがある。またこの地域でも町方の旧松山町などでは埋葬地と石塔造立場所を同じくする単墓制の墓地も見られる。現在、こうした両墓制的墓制は急速に崩壊しつつあるが、この地域の村落の近世から近代の墓制が基本的に両墓制であったことは疑いない。ただ宇陀では、同じ両墓制でも北の都祁地域を含む大和高原<sup>ひがしさんちゅう</sup>の東山中のように、ハカにおける年齢別や男女別の埋葬地区分はほとんど見られず、限られた面積のハカに死亡順に埋葬が行われていたらしい。

この地区では丘陵上に各家のハカとラントウバを接して営む菟田野町入谷墓地の記録調査を行った。ここでは、この墓地に隣接して存在した中世墓地の石塔類が多数掘り出されており、あるいは中世墓地から近世以降の現存墓地への展開過程が明らかにしえるのではないかと予想した。ただ調査の結果からは現存する最古の石塔は1658年のものであり、また中世の石塔の出土場所と現在の墓地の場所は隣接するとはいえその場所を異にしており、連続するものとはとらえられなかった。

入谷の中世墓地は、中世宇陀では秋山氏とともに大きな勢力を誇った沢氏の同名衆ないし与力で「入谷殿」と呼ばれた在地武士の一統墓であり、近世になって新たに成立する地縁的な村落墓地とは性格を異にするものと考えられた。宇陀地域の現在の墓地やその付近には多数の中世石塔類が見られる例も少なくないが、明らかに中世墓地から近世以降の現存墓地への連続が確認できるような例は見出すことができなかった。

都祁村の吐山地区もまた典型的な両墓制地域である。ただしここでは、埋葬地としてのハカと石塔造立地のラントウバが近接している例が多い。この地区の墓地については古く竹田聴洲が精力的な調査を行い、九つの垣内からなる大字吐山では、それぞれ一つの村落共同体である垣内がいくつか共同ないし単独で会所としての寺庵をもち、それが各垣内の石塔墓<sup>まいりばか</sup>（詣墓）と一対をなすことを明らかにしている。またそれらの墓地では、地縁共同体である垣内単位に造立された永禄期の庚

申地蔵碑を村落共同体共通の供養碑としていたのが、元和～正保期頃から家の意識の高揚とともに個人の墓碑の造立が始まり、元禄～享保期には各家の石塔造立がさらに進んだと考えられた。こうした吐山地区における竹田の調査・研究は、墓地の石塔類を歴史資料として活用し、村と寺と墓を有機的に関係するものとして把握しようとしたすぐれた仕事である。ただ、そこで資料化されているのは、すべて有銘の石塔類で、無銘の石塔類はまったく問題にされていない。

私たちが吐山で調査対象としたのは、吐山の村落墓地のうち大夫、清水北、清水南の3垣内の共同墓地であるトサカ墓地と城福寺垣内のムシロデン墓地、この地の地侍吐山氏一族の墓地である春明院墓地である。このうち春明院墓地が、有銘石塔のあり方から見る限り他の垣内墓地より先んじて石塔の造立が見られることは竹田の指摘のとおりである。ただトサカ墓地やそれに隣接する極楽寺の境内では16点の別石五輪塔の部材や15点の箱仏が見られ、この墓地での石塔の造立が16世紀台に遡ることは疑いない。極楽寺の地蔵堂には、永禄3年(1560)の「庚申待一結衆」の銘をもつ地蔵碑があり、この時期にはすでに垣内の共同墓地として成立していたことは疑いない。こうした永禄前後のきわめてよく似た地蔵碑は、この吐山のいくつかの垣内墓地ばかりでなく広く大和の山さんちゅう中くんなかや国中の墓地に迎え地蔵として今も遺っているが、このことはこうした中世末期の村落墓地の形成、あるいは再編成に宗教者の関与があったことを物語っている。さらにそれと並行して吐山の村落墓地でも、すでに石塔類の造立が始まっていたことが知られるのである。

こうした中世の石塔類と17世紀以降次第に増加する近世石塔の性格の同異についてはさらに検討が必要であるが、宇陀地域ではその成立が中世にまで遡ることを明らかにできなかった村落の共同墓地が、ここ吐山ではそれが中世末の16世紀に遡ることは疑いない。この点、吐山氏の春明院墓地では16世紀の有銘石塔が少なからず認められることは重要であるが、墓地自体の成立時期としては他の墓地との間にあまり大きな差異を考える必要はなさそうである。またこうした奈良県山間部での中世墓地の消長については、中世末の大和の在地武士層のそれぞれの動向と関連する可能性が大きいと思われる。さらに16世紀段階の近畿地方各地の墓地の発掘例では、この時期には土葬ないし火葬による埋葬の上に石塔が立てられるのが普通であるが、それと近世から現在に及ぶこの地域の両墓制的慣行がどうつながるかについては、広く奈良県域全体の中世墓地から近世墓地への転換の問題として検討しなければならない問題であろう。

□

第2部については、奈良盆地部、すなわち国中の二つの郷墓、奈良県北葛城郡新庄町平岡極楽寺墓地と同天理市中山念仏寺墓地の調査の結果を報告した。ここで調査対象に選んだ奈良盆地の西部と東部の二つの郷墓は、ともに奈良盆地部の郷墓としてはごく標準的なものであり、また比較的古い墓地景観を留めている、現在では貴重な存在である。その成果のまとめはすでにすませたのでくり返さないが、その結果いくつかの大きな問題が提起された。以下その若干についてふれておこう。

郷墓の墓地の利用形態に関しては、こうした奈良盆地部の郷墓においても近世の段階では埋葬地と石塔造立地を異にする、いわゆる両墓制的な景観を呈していた可能性が大きいことを指摘できたことが重要であろう。平岡極楽寺墓地では、現在も一部の村がこの墓地を村の共同の埋葬墓地うめぼか(埋葬)として利用しているのである。また中山念仏寺墓地も、広大な郷墓が墓郷を構成する各村ごとの墓域に分割されており、中世末から近世初頭の古い時期の石塔の分布状況からも、そうした

墓域の分割がそれほど新しい時期に行われたとは考えがたいのである。さらにそれら各村の墓域が相当広い面積をもつこと、また近世初頭の段階においては、石塔の造立がごく一部の家に限られていたと考えざるをえないことなどからも、これら村ごとの墓域は基本的には村の入会の埋葬墓地で、その一角に一部の家が石塔を立てるといった墓地景観の復元が可能になるのである。

さらに中山念仏寺墓地では、墓郷を構成する 10 大字のうち特定の 3 大字の墓域には中世末～近世初めの石塔が少なく、それと符合するように大字内の寺院境内に近世の石塔が少なからず遺存することが知られた。これらの大字では、埋葬は郷墓の村の埋葬地に、石塔は村内の寺院境内に立てていたと想定されるのであり、まさにこの点からも両墓制的墓地利用が行われていたことが裏付けられるのである。

奈良盆地の他の郷墓でも、奈良市永井墓など一部の郷墓では両墓制的墓地利用が行われていたことが指摘されているが [新谷 1991]、今回の調査の結果からも、近世の段階では奈良盆地部においても東山中と同じように、両墓制的墓地利用が予想以上に広範に行われていた可能性が考えられるのである。今後他の郷墓においても、その痕跡についての意識的な追求が行なわれなければならない。

こうした郷墓における墓地の利用形態の問題とともに、今回の調査の成果で特に注目されるのは、多数の石塔の悉皆調査の結果、郷墓における石塔造立の時代的变化が明瞭に把握できるようになった点であろう。さらにこの石塔造立の時代的な変化が、すべての郷墓に共通するものではなく、墓地ごとの偏差もまた少なくないことを明らかにした。

平岡極楽寺墓地では、銘文から年代の明らかな石塔は、16 世紀、17 世紀、18 世紀と次第に増加し、19 世紀には若干減少するが、20 世紀になって急増する。また 15～16 世紀のものと想定される無銘の別石五輪塔、一石五輪塔や箱仏も 230 基も遺存している。一方中山念仏寺墓地の場合、年代の判明する石塔は 14～15 世紀のもの 2 基、16 世紀のもの 48 基であるが、17 世紀のものは 1,294 基に増加する。特に 17 世紀後半には急増し、さらに 18 世紀前半から中葉にはその極に達し、18 世紀のものは 2,477 基となる。しかし 19 世紀には 1,175 基に減少し、20 世紀のものも 1,729 基にすぎない。ここでも大半が 15～16 世紀のものと思われる無銘の別石五輪塔が、最も多い空風輪で数えると 361 点、16 世紀後半に中心があると思われる箱仏が 373 基もある。さらに村木二郎の試みた背光五輪塔の型式学的検討結果によると、年代不詳の背光五輪塔の中には 16 世紀後半に遡るものが相当数あることが知られるから [村木 2004]、これらを加えると 15～16 世紀のものはかなり増加することになる。

このように平岡極楽寺墓地、中山念仏寺墓地とも、石塔が 17 世紀後半から 18 世紀前半に急増することは、単に石塔造立の風が一般化したことに留まらず、郷墓それ自体の性格の変化や民衆レベルの墓制そのものの変化とも関連する可能性もあって、きわめて興味深い。ただこうした問題はさらに他の郷墓の実態の分析をも含めて多角的に検討する必要がある、今後の大きな検討課題とせざるをえない。また考古学の立場からは、無銘石塔の型式学的検討によってその年代をより限定することが大きな課題となろう。

今回調査を実施した二つの郷墓の成立については、発掘をとまなわない現状調査の限界もあり、突っ込んだ考察は困難である。ただともに 15～16 世紀に遡る石塔が相当数遺存し、また 14～15 世

紀に遡ると思われる総供養塔的性格を想定できる大型五輪塔が存在することは重要である。遅くとも14世紀にはこれらの郷墓の核になる墓地の形成が開始されていたことは疑いなかろう。

山城木津惣墓、河内寛弘寺神山墓地などの総供養塔の銘文からは、こうした葬送祭祀の講の組織化が律宗などの下級僧侶によって進められたことが読み取れる〔細川1987〕。郷墓の成立は在地における共同体としての惣の成立との関わりだけでは説明が困難である。特に今回の調査の結果からも奈良盆地の郷墓の成立が、中世でもその前半期にまで遡る可能性がきわめて大きいことが想定されるようになった。この点からも、その成立についてはより多角的な解釈が求められるのである。惣村と呼ばれる村落共同体の形成とあわせて、民衆の「現世安穩、後世善処」の願いに応じて葬送祭祀の講の組織化を進めた律宗僧侶をはじめとする宗教者の関わりを無視することはできないであろう〔白石2000〕、またその前提として古代末以来の地域の葬地（遺骸処理地）との関わりも含めて考える必要がある。この問題に関する筆者個人の展望については、本共同研究の報告書本編（『国立歴史民俗博物館研究報告』112）に拙考を示しておいたので参照いただければ幸いである。

□

今回の調査については、従来から両墓制地帯と理解されていた奈良盆地東方の東山中や宇陀地域の村落墓地と、一般には単墓制墓地と理解されてきた盆地部の郷墓の両者について、墓地の実態調査を踏まえて一体的な検討が可能になったところに少なくない意味があろう。その結果、盆地部の郷墓についても、近世段階では両墓制的墓地利用が相当広範に行われていた可能性が大きいことを明らかにした。したがって、現在の山中と国中の墓地に見られる大きな差異は、両墓制的墓制の崩壊、ないし変質過程の遅速の差にはかならないことが予想されるのである。

さらにこの問題は、奈良県をはじめとする近畿地方各地で行われている中世墓地の発掘の成果とも総合して考察する必要がある。この点からは、発掘されたこの地域の中世墓地が、いずれも基本的には埋葬の上に石塔を立てる、まさに単墓制の墓制に基づくものであることから、近世の広範な両墓制的墓制との差異をどのように整合的に説明するかが大きな課題として浮上する。この問題は単に中世から近世への葬墓制の変化の問題にとどまらず、古代以来の地域社会での葬制・墓制の変遷過程という大きなスケールの中でとらえる必要のある問題である。またそれは、当然のことながら地縁共同体としてのムラやイエの成立の問題、さらに仏教をはじめとする宗教の役割や民衆の基層信仰の問題と関連させてとらえなければ解けない大きな課題でもある。

こうした在地社会の変化と仏教の役割を含めて中世から近世にかけての葬制・墓制の変化とその意味を解明するという課題は、きわめて大きい。私たちもここに報告した調査の成果を踏まえて、この課題の解明にさらに努力したい。その意味からも、20世紀末の時点での奈良地域の山中と国中のいくつかの村落墓地の現状と所在するすべての石塔の情報を記録化できたことは、大いに意味のあったことであり、不十分ながらもこの研究の所期の目的を果たしたものとして率直に喜びたい。ここに報告した奈良地域の墓地の調査記録が、葬制・墓制の問題から人々の基層信仰、さらに葬送をめぐる社会史などの研究にいささかでも役立てば幸いである。 (白石)

---

**●引用・参考文献**

---

- 白石太一郎 2000 「もう一つの世界—人びとは墓地をどのように営んだか—」『ものがたり 日本列島に生きた人たち』岩波書店
- 白石太一郎 2001 『近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究』平成9年度～平成12年度科学研究費補助金研究成果報告書 国立歴史民俗博物館
- 白石太一郎 2004 「中・近世の大和における墓地景観の変遷とその意味」『国立歴史民俗博物館研究報告』112
- 新谷 尚紀 1991 『両墓制と他界観』吉川弘文館
- 竹田 聰洲 1971 『民俗佛教と祖先信仰』東京大学出版会
- 坪井 良平 1939 「山城木津惣墓標の研究」『考古学』10-6
- 細川 涼一 1987 「河内の西大寺末寺と惣墓」『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館
- 村木 二郎 2004 「石塔の多様化と消長」『国立歴史民俗博物館研究報告』112